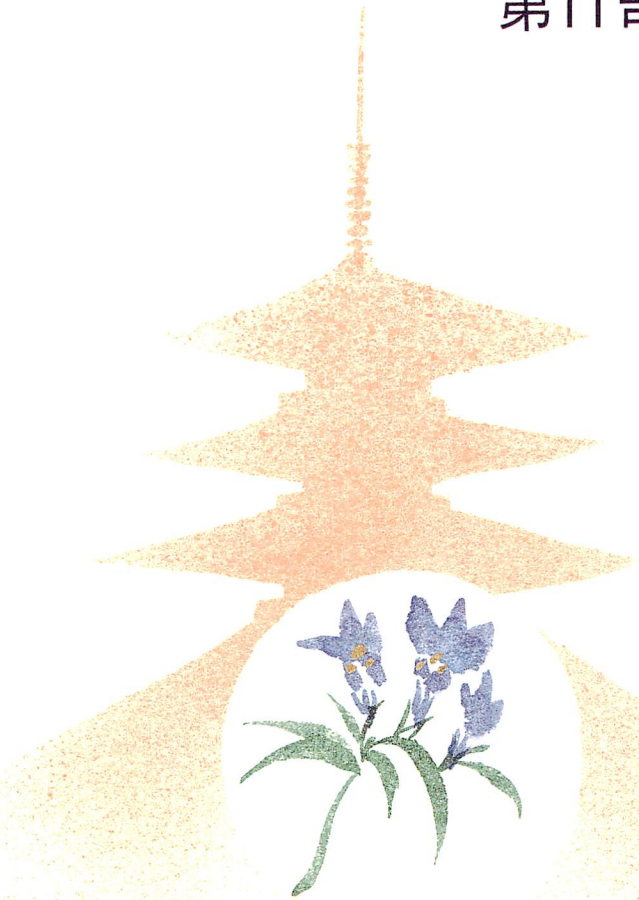
みめぐみの

第11部



みめぐみの

第11部

大谷光道著

目次

「先祖供養」って何？……2
夏の季語……2
今さえ楽しければ……6
亡くなった人の成仏を願う……10
先祖供養は禁止？……13
足元を見よう……19
読者の頁……26
〈感想・意見〉……26
あとがき……31

「先祖供養」って何？

夏の季語

そろそろお盆の季節です。都会に出ている人達が、里、実家に帰る、帰省ラッシュというのが始まります。「盆と正月が一緒に来た」ということばがあるほど、日本では国民の休日でもないのに、誰でも必ずといってもいいほど休暇をもらって、〝田舎〟に帰って親戚が集まるという習慣があります——もっとも、最近では海外旅行のラッシュもたいへんなもので、「お盆休み」はやがて「旅行休み」になるのでしょうか——そして仏壇の前でお盆のお勤めをする。そこには亡くなったご先祖方が一緒に帰って来られると考え

られています。

お盆は盂蘭盆会（うらぼんえ）といって、目連尊者（もくれんそんじゃ）（お釈迦様のお弟子）が、餓鬼道（がきどう）に沈んでいるお母さんを見つけて救うという内容の『盂蘭盆経（うらぼんきょう）』に因んで、亡くなった人達で苦しみの世界に沈んでいるのを助けようということから始まったものです。

テレビ番組でも怪談の季節で、幽霊ですね、お化けの季節。これもお盆と関係ないわけではないんですが、そういう話はゾーッとして涼しくなるので、幽霊は夏のものということになっています。「幽霊」は夏の季語（笑）。テレビのなかったラジオのころのほうが、映像のない分かえって想像力がはたらいて怖く、怪談としての意味があったような気もします。

子供の頃、ラジオで講談などを聴きながらそっと斜め後ろを見たくなったことや、テレビの『四谷怪談』など四大怪談を思い出します。「怖いもの見たさ」とはよく言ったもので、こういう番組は始まる何時間も前からそわそ

餓鬼道に堕ちた母（右）を見つけ嘆き悲しむ目連尊者（左）と母の救済を手助けする聖者たち（左上）。餓鬼道は貪りを重ねた者が生まれ変わる苦しみの世界。口に入れようとするものは水でさえも火になって消える。

わしていたものです。

最近はあまり幽霊の番組を見ないなあと思っていたら、どこかの中学で女の子の幽霊が出るというお話をやっていました。そこでふと気付いたのは、「出てくるほうの幽霊ばっかりで、出るほうの幽霊がない」ということです。だいたい映画とかテレビとかで見るのは、出てくる幽霊を怖がる側という内容のものです。

これに対して、出るほうの側、つまり幽霊自身の心の動き、行動を描いたドラマはまず見たことがありません。「化けて出てやるぞ。」なんてね（笑）。口で言うだけで、実現はしません。本気で考えていないということですね。ああ、でもお能は別のようです……。

よく言われることですが、日本では現世、この世、五十年百年のこの世の命のことだけを考えて、生まれる前のことや、死んだ後のことには目を向けていない——逃げようとしているのかもしれませんが——この世、生きてい

る間さえ楽しければそれでいいんだという考え方が支配的です。「出るほうの幽霊」がないことも、これを裏付けているのではないかと感じたということです。

これは何も、私が幽霊の存在を信じているとか、私の死後「化けて出てやろう」（笑）とか考えていると言っているのではないんですよ。自分の死後のことを考えようとしていない人が多いのではないか、とお話しているんです。因みに、幽霊の存在について仏教では、お釈迦様がまったく触れられなかったことから、あるともないとも言いません。

今さえ楽しければ……

このような日本人の人生観というか、現世観というか、これは昨日今日のことじゃなくて、奈良時代からずっと根底にあるものなんですね。

万葉集の歌人で、大伴旅人（おおとものたびと）という人が詠んだ歌に、

この世にし　楽しくあらば　こむ(来)世には　虫に鳥にも　我はなりなむ

というのがあります。

この世さえ楽しければ、来世には虫やら鳥にでも、私はなってしまおう。

皆さんはいかがですか。

「インド人にこの歌のことを話したら、たいそうびっくりした。」という話を本で読み、私もこの歌のことを知りました。この世を好き勝手な生き方をしてそのために地獄に堕(お)ちると、最低でも一兆六二〇〇億年の間そこで苦しめられることになるので、この世を、今の人生をつつましく生きるのがインド人なんだということが書いてありました。（ひろさちや著『仏教とキリスト教』）

地獄には八段階あり、ここでいう「最低でも」というのは、一番罪の軽い等活(とうかつ)地獄のことだと思われます。今まで私は、「地獄に堕ちればとにかく長い」というぼんやりとした感覚しか持ち合わせず、「〇〇の何年が〇〇の一

日で……」という地獄での寿命の説明に出くわすたびに、「いつかこの掛け算をやってみよう」と思っていました。ちょうどいい機会なので、ご一緒にやってみましょう。

等活地獄で苦しみを受ける長さについて、地獄のことが細かく描写された『往生要集』（親鸞聖人が最も敬われた七人の高僧のお一人である源信僧都（げんしんそうず）の作）には、

人間世界の五十年が四天王天（したんのうてん）の一昼夜にあたる。

四天王天の寿命は五百年で、これが等活地獄の一昼夜にあたる。

等活地獄の寿命、つまり罪人が苦しみを受ける期間は五百年。

とあり、これらを掛けると、

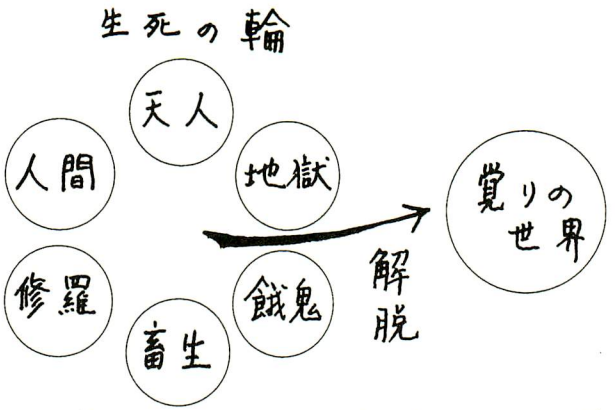
50×365.25×500×365.25×500＝1,667,594,531,250（年）

となります。ここで、365.25の.25が芸の細かいところで、四年に一度の閏年（うるうどし）も計算に入れてあるんです（笑）。一兆六二〇〇億年とは四七〇億年ほど違

うけど、許される誤差の範囲内でしょう（笑）。これより罪の軽い七種類の地獄については寿命はさらに長く、四倍、四倍と増えていきます。

この間、テレビで人気者だったきんさんが百八歳で亡くなられたそうですが、百歳を超えるということは容易ではありません。それでも、一兆六二〇〇億年という長さとは比べようもありませんね。

悪いことをしたら地獄に堕ちるという考え方は、お釈迦様よりもずっと前からインドで行われてきた「輪廻（りんね）思想」の一環です。六道といって、地獄、



餓鬼、畜生、修羅、人間、天人という六つの境涯のどれかにくるくると生まれ変わり死に変わりすることで、輪廻または生死ともいわれます。

仏教は、このくるくる巡る「生死」の輪から解脱して――抜け出して――覚りの世界への到達を目標とする教えです。

亡くなった人の成仏を願う

もう一度はじめのお盆の話に戻りましょう。

「〇〇さんのご冥福をお祈りいたします。」というのが、お悔やみの言葉としておきまりのようになっていて、それほど、亡くなった人に対しては「冥福を祈る」のが常識のようになっています。

その心情・動機には二通りが考えられます。もちろんこの二通りが、一人の心の中に同居していることもありますが……。

第一は、亡くなった方に供養(お供え)し、回向(良い行いを積み、その功徳を他人の成仏のために回らし向ける『第三部』参照)する、ちゃんと成仏してもらおうと願ってお勤めをする、遺族がお勤めをしますね。一回のお勤めでは無理でもいずれは成仏してもらおうと思って、毎年、お盆もそうですが、年忌・月忌など、定期的にお勤めをするわけですね。現世からの応援団です(笑)。

そこで仮に、この亡くなった人が生きていたころ、「どっちみち、子供やら孫がちゃんと回向・供養してくれるから後のことはかまわん。ちゃんとお勤めをして成仏させてくれるやろうから、あとのことは気にせんでもええ。どうせ、長くても百年ほどのこの世の命、人に迷惑かけてもかまわん。思いっきり楽しんでやれ。」という現世中心主義だったとしても成仏できる、という考え方です。自分自身が死後どうなる、だから今何をしなければならん

かということがまったくいいかげんになっていて、応援団任せになっているといえます。つまり「化けて出てやる」という勢いのある人のほうが、ある意味でまだいいということですね（笑）。

第二は、死者の成仏を願う目的が必ずしも死者のためとは言えず、別のところにある場合です。故人の遺志に反する悪いことをしてその棺に向かって合掌して、「おとうちゃん、化けて出んといてや。」（笑）

無念の死を遂げた人とか、交通事故など不慮の事故による死に遭った人は、祟りを起こす率が高いという説があるようで、何かで読んだことがあります。死亡事故のあった道端に親族や加害者、さらに死んだ人とは無縁の人でもお花を添える。そこで拝んであげるということももちろんありますが、心の奥に「祟られたら怖い。」というものが潜んでいることもあるのは否定できません。不成仏霊がどうだとか、その霊を成仏させる方法がどうだとかいうことを課題にしている宗教もあります。

祟りを恐れての回向や供養。死者の成仏を願う目的がそんなところにある。死者に対して「成仏でもなんでもいいから、どこか遠いところへ行ってちょうだい。」（笑）と願ってのお勤め。祟りという災（わざわ）いを起こす邪魔者を追放して、現世を快適に過ごそうとする。このような回向や供養は、死者のためではなく、今の自分のためとしか言えません。

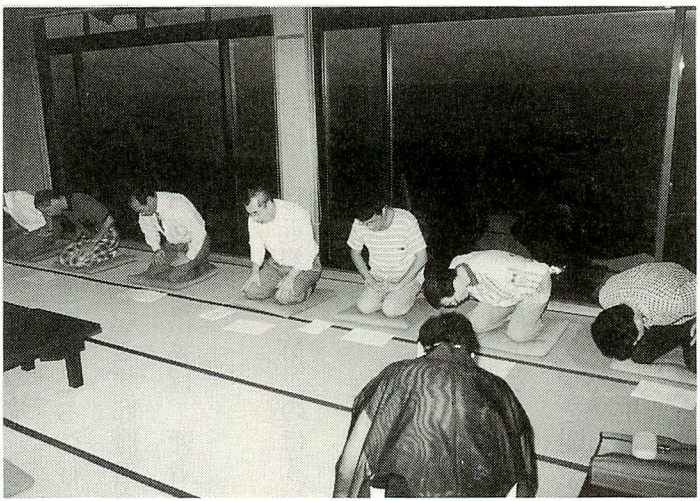
どちらかというと、亡くなった人が第一のほうは近親者、第二のほうは血のつながりの薄い人という違いがあるかも知れません。

先祖供養は禁止？

本来仏法というのは、私たちが諸々の悩みの中からこの私をどうするか、どうしてより高度な「楽」に到達するか、つまり、どうして覚りを開くか、を最も大切な課題とするものです。浄土真宗の私たちでいえば、生きている今ご信心をいただいて、この世の命を終わったときお浄土に迎えられて覚り

を開かしていただく、仏様にならせていただく、という確信を持つようになるのが第一の課題です。亡くなった人を救うというのは、二の次の話です。

本当に人を救うには、「救われたらどうなるのか」ということに自信と責任がないといけないはずです。例えば「お浄土が素晴らしい」と私が思うから、他人（ひと）にも行ってほしいと思うわけでしょう。その自信もなくて、どうして他人の成仏など願えるのでしょうか。



神戸で市民対象の坂東曲練習風景

だからこの「自信」を持つことがまず第一だということです。

たとえて言うと、溺れそうになっている人を助けるには、自分が泳ぎに自信があるか、浮き袋や命綱につかまっているかなどの前提条件が必要です。泳げもしないのにいいかっこして飛び込んだらどうなるでしょう。

あまたあるお聖教（聖典）なのですが、私たち自身の往生や成仏のことは書かれていても、死者の成仏のことを書いたお聖教はほとんどありません。ただ、『歎異抄』に親鸞聖人のお言葉として次のような件があります。

親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず。

「親孝行のためにと思って、一返でも念仏したことはございません。」と御開山親鸞聖人がおっしゃったというのです。「孝養」は、生前死後にわたる親孝行のことで、死後については追善供養を指します。

これだと、聖人が先祖供養を禁止なさったとも読み取れます。だとする

と、浄土真宗では先祖供養をしてはいけないことになります。

その続きを見てみましょう。（原文は末尾参照）

というのは、あらゆる生き物は皆、私たちが何度となく生まれ変わり死に変わりしてきた間に、一度は親子や兄弟の間柄になったことのある者たちなのです。だから、今この世での父母だけでなく、次に生まれ変わるときには仏になって、この親や子、また兄弟たちを皆助けなければならないからです。

自分の力をたよりに励む善行であるならば、そのような自力の念仏の功徳をさし向けることによって、父母を助けるということもあるでしょう。

しかし、もっぱら自力を捨てて、他力によって急いでお浄土へ行って覚りを開いてしまうならば、その覚りは阿弥陀さまと同じ内容のものなので、餓鬼や畜生、地獄などどのような苦しみの世界に沈んでいる人をも、自由自在に不思議な力や巧みな手だてを使って、縁の深い者からど

んどん助けることができるのです。

念仏での救済は禁止というのではなく、〝今は無理〟ということですね。そして何よりも自分自身の成仏が先決で、成仏の後ならば自由自在に救うことができ、さらに父母に限らず〝広く救うべし〟です。泳ぎの話で言うと、「他人を助けようとする前に、他人を助けられるようになれ。」ですね。

だから、「親孝行をする前に、親孝行のできる私になれ。」ということです。阿弥陀様は私たち凡夫を救ってくださるのですが、「成仏させる」という親孝行は、自分が親に対して阿弥陀様と同じことをしようとしていることになりますね。こう考えてみると、今念仏を称えて父母を救おうなどと、大それたことを考えていたということに気付きます。「成仏させる」という親孝行は、「生きている間の親に楽をさせるという普通の親孝行とは、比べ物にならぬほどむずかしいことである」ということがわかってきます。

だから、まず自分が成仏することであって、成仏して神通力（じんずうりき）、パワーを我

が物にして、そして順次、根こそぎ助けるようにしないとあかんということですね。そうすれば、生あるものすべてに「真の親孝行」ができることになります。

ただ、「お浄土に行って成仏してそれから先のこととなると、とても実感が湧かない。」と言えます。ご開山のおっしゃっていることの要は、成仏のための「信心」を我がものにするということですから、「私が信心をいただくことをご先祖方が喜んでくださる。そのことが親孝行、先祖供養だ。」と考えればいいでしょう。

ところで前後しましたが、「自力念仏を含めて自力の回向ならば、父母を助けられもするだろう」と、気になる一文があります。でも、それはこの前段の一章を読めばすっきりします（本文は末尾参照）。自力（聖道門）では、「いかにいとおしいと思っても思うままに救済できない。」のに比べて、他力（浄土門）では「おもふがごとく衆生を助けることができる。」とあり、

結局、今見てきたのと同じことではありますが、自力と他力との救済の違いが具体的に述べられています。

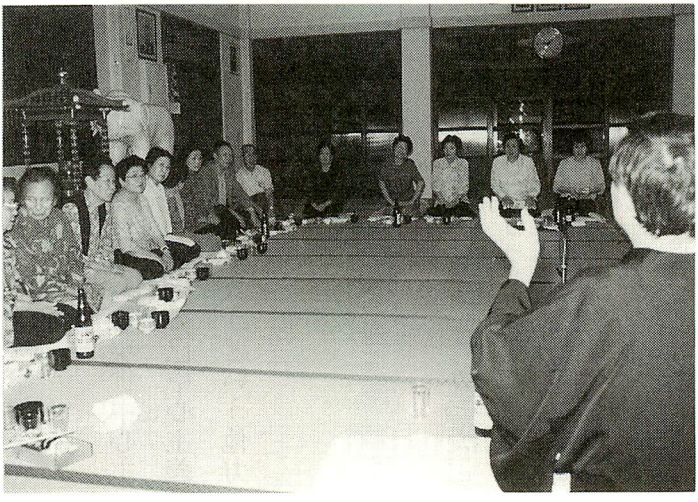
先程の祟りの話では現世を快適に過ごすことにとらわれている現世中心主義を問題にしましたが、今度は自分の親だけを助けようという自己中心主義には無理があり、他人も、そしてすべての生き物もひとしく救うという他力の大慈悲が明らかにされています。

足元を見よう

ここまでの話で、供養や回向について「そこまで深く考えていなかった。」とおっしゃる方もおいでになると思います。それもごもっともなことで、「親孝行のために念仏しない」という一見奇異に感じる聖人のお言葉に触れて、「何でや。何で親の冥福のために念仏しやへんのや。」と思われるのも無理からぬところです。でも、私の話もご理解くださったことと思います。

それでは「効き目のない回向・供養ならやめとこうか。」と考えられるかもしれません。ところが、そんなことをすると、現世に残った私たちのほうが仏法から遠ざかってしまいます。効き目のことはいったん横において、自分の足元を見てみましょう。

ご先祖や両親の法事であるとか、七日七日のお参りであるとか、それがあるからこそ、そのご縁に引っ張られてお勤めをしているようなもんです。そういうご縁があるからこそ阿弥陀様に手を合わせたり、そこでお説教を聴い



たり、そして自分自身のことを考えたり、そういう場所をご先祖方に作ってもらっているわけですね。ご先祖を供養するんだとか回向するんだとか力んでみたり、あるいはそこまで深く考えずただ法事に参加した場合でも、逆に亡くなった方に仏法のほうへ引っ張ってもらっている。むしろそういうことに気付くんじゃありませんか。

父母やご先祖の成仏を願うつもりが、実は逆に私が往生成仏できる身となるようにご先祖から「願われていた」ことに気付き、自分自身の信仰が大きく前進するはずです。親孝行を動機として仏法に近づく、そしてやがて真の親孝行ができる私になるのです。

だから、『歎異抄』第五章の「父母孝養」の上っ面を読んで、「真宗は先祖供養禁止」と決めつけたり「念仏は効き目がない」と片づけたりなどして、ご法事という私が気付くための場を否定してしまうならば、それはむしろ仏法に近づこうとする重大なチャンスを逃してしまうことになります。別の言

い方をすると、ご法事を仏法への入口と考えることです。

浄土真宗は、ご先祖の忌日の法事、お正月その他のお祝事はもちろん、あらゆる機会を私の信心獲得のご縁として捕らえ――毎日同じようなことを繰り返している、日常生活の中での些細なこともそうです――聴聞することを勧める教えです。また「聴聞」というのは何も、お説教を聞くことだけではありません。目に入るもの、鼻に臭うもの、手に触れるもの、舌に味わうもの、感じるものすべてが聴聞です。

浄土真宗においては、ご信心をいただいていれば、こちらで息を引き取ると同時に、すっとそのまま時間をおかずにお浄土へ行ってしまうんですね。仮にそれが自力の念仏であっても、一回でも南無阿弥陀仏を称えていれば、お浄土の一番中心の報土といわれるところへは行けなくても、とりあえず辺地といって隅っこのほうの辺鄙なところへは行けるわけですね。その場合は

そこでかなりの時間がかかりますが、やがて報土のほうへ行けることになるわけで、少なくともそのようにして、すっとお浄土へ行くわけですね。（『第五部』参照）

ご先祖の中には自力の念仏をも称えなかった方があったかもしれない。そしてどこかであるいは迷っておられるかもしれない。そういうことがあっても、そのために何とかしようと思っても、今は無理なんだから、まず自分がお浄土へ行くことを考えなさい。お浄土へ行きさえすればだれかれの隔（へだ）てなく自在に成仏させることができるのだと。これが、御開山親鸞聖人のお示しになったことです。

ああ、それと「祟り」のことですが――今日のお話の本筋とは違いますが、気になさっている方があるといけないので、一言付け加えておきます――ご先祖が祟るということはありえません。皆さんは自分自身が子孫に祟ってや

ろうと思われますか。子孫の幸福は念じても不幸は念じませんね。これだけで明らかだと思います。これは、多くの識者の言でもあります。（大法輪閣『霊とは何か』）

《参考》

一　親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず。そのゆゑは、一切の有情はみなもつて世世生生の父母・兄弟なり。いづれもいづれも、この順次生に仏に成りてたすけ候ふべきなり。わがちからにてはげむ善にても候はばこそ、念仏を回向して父母をもたすけ候はめ。

ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道・四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもつて、まづ有縁を度すべきなりと云云。（『歎異抄』第五章）

一　慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏に成りて、大慈大悲心をもつて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生に、いかにいとほし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏申すのみぞ、するとほりたる大慈悲心にて候ふべきと云云。（『歎異抄』第四章）

有難し：日常語の「有難い」と違い「有ることが難し」「ほとんど実現しない」。

存知のごとく：自分の思うとおり。

始終なし：首尾一貫しない。

読者の頁

感想 意見

富山県高岡市　匿名希望

読後感としていつもほのぼのとありがたい思いが残ります。光道様のお人柄なのでしょうか。横ばかり見て世間にもみくちゃにされて苦しんでいないでまっすぐ阿弥陀様の方を見てお念仏を称え進んでいかなければならないと教えていただきました。ありがとうございました。

静岡県静岡市　別符　和さん

『みめぐみの』はそっと静かに開いて読ませていただくという自ずと姿勢がで

きます。

十六頁（『第十部』）に横は横で大事であるけれれども、縦の関係、阿弥陀仏と私。「前を見る人」「縦の関係を忘れない人」にこれは心に響きました。ほんとうにそのとうりだと横を気にしますと己を失ってしまうようでございます。ありがとうございました。

東京都大田区　山崎きみさん

私『第十部』に苦しみをのがれるには欲を捨てる誠に生意気申しましてお許し下さい。

誰にも欲気や大小の苦しみない方は如何かと思います。私は心の支えと真宗の教え信じ神仏の御守護、先祖のお陰様と良しき悪しきにお念仏となへると気軽に和みます。念仏は心の支えと有り難く口にさせて頂きおります。

恵まれし卒路の人生天空にいり召さるるも無心なりぬる

違っている私の思いです。教えをお願い申します。

愛知県日進市　黒部恵那さん

「皇太后様とお別れ」は、楽しくほほえましいシーンを想像して心が温かくなりました。

また、光道様自作のアンプを受け取っての御質問も聞き上手の大切さに我が身をふり返って反省しています。

愛知県知多市　岩下藤子さん

「世直しはできるか」（『第十部』）

何度も読みました自分が努力して前むきになって行けば必づよくなると思います。他人から見られていると思わずいつも自分のやっている事は阿弥陀様が見て下さっていると思えば常に自分は胸をはって生きて行ける様思います。何か自分

にやましい気持ちがあればいつも阿弥陀様に見られていると心掛けています。誰がわかってくれなくとも阿弥陀様にわきっとわかってもらえると信じて生きています。孫にもよく言い聞かせています。自分に強く生きて行く事だと思います。

東京都杉並区　高岡みよ子さん

『みめぐみの』を読ませてこの御縁を合わせて頂き私の心ふかく信仰にお教にめぐりあえ感謝、それは私の心愛する主人との別れ、必ず別れるとの言葉。『みめぐみの』を読ませて頂きこれからの人生に元気の源の言葉に宗教といっしょに心にやすらぎを得る事が出き、一生懸命これからの何年かの道しるべができ光道様のお教を私のお手次寺にて機会をお待ちしています。

昔の様、みんなお寺で心一つにしてやさしい一時をえる様な社会を臨んでいます。

東京都品川区　鈴木健太郎さん

道中御影が無事行われました事をお喜び申し上げます。今後毎年ますます盛んに行われます事を願っております。

（『第十部』）二番目の世間と前を見るお話しは日ごろからよく考える事なので関心を持って拝見いたしました。まわりばかりを気にすると中心が自分になくて混乱します。他人がどう思うかよりも自分の信念の方が大事だと思うようになりました。

キリスト教でも信仰中心の生活とまわりにばかり目をむける生活との違いということをいっています。

また、皇太后様の思い出を感慨深く拝見いたしました。特に光道様が昭和天皇を呼び出されたお話しはほほえましく拝見しました。

あとがき

みめぐみの刊行委員会

今回は、ともすれば誤解したまま通り過ぎてしまいそうな問題の一つである、「先祖供養」についてお話して頂いております。そしてそのことを、教えの上からのみならず、私たちの信仰の原点から解き明かして下さいました。

各部は勿論、今回のお言葉も、噛めば噛むほど味わい深く、また、読後にはほのぼのとした何かすっきりした満足感をお持ちになったことと思います。

また、すでにお気付きの通り『第十一部』を数えるにあたって、表紙絵のデザインが少し変わりました。これまでのカギ型の図柄を一新して、塔のシルエットに野花が育まれる構図となりました。

『みめぐみの』のこころを座右として、ともに歩むお同行でありたいものです。読後のご感想、ご質問を気付かれるままに是非刊行委員会までお寄せ下さい。

みめぐみの　第11部

2000年11月５日　印刷
2000年11月10日　発行

定価 200円

著　者　大谷光道

発　行　みめぐみの刊行委員会
〒600-8167 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754
本願寺寺務所内
TEL.075(351)3555　FAX.075(351)3120
振替口座　01060-5-56990

印　刷　㈱中外日報社

みめぐみの刊行委員会刊